

地方の常識

最終回

地域特性を活かした独自規格

第12回

見える水のある生活 郡上八幡水事情



今 は夜通し踊る祭りや有名な岐阜県郡上八幡だが、独特の水循環システムも有名で、町の至るところで水に出合い、水の音が聞こえる。

この水のある生活が、まさに「地方の常識」であることが明らかになったのは、1970年代初めのことだった。地域を訪れた学者の指摘に、地域の人びとは驚いた。この水循環システムは郡上八幡の人びとにとっては常識である。1985年、環境庁が実施した「名水百選」第一号に、地域の湧き

水「宗祇水」が選ばれるに至って、ようやく地域の人びとも独自性が認識されるようになった。まち中を縦横無尽に走り抜ける用水路や川は、水道が100%普及した後も多くの人が生活に活用している。

水循環システム形成のきっかけは1652年と1919年にまちを襲った大火だった。防火用水として山からの湧き水を水舟(写真1)のため、川からの水を用水路(写真2)でまち中を通し、豊富な井戸水をくみ上げる。これらをすべて防火のために備え

たが、その後、飲料から洗濯など生活用水としての文化が育ち、水循環システムが出来上がっていったのである。

特に水舟と呼ばれる仕組みはその形状が特徴的で、防火のための3点セットが備えられている。3点セットとは、鐘と鐘を叩く木槌とバケツである。火災時にはこれが活躍するのだろう。古い町家の残るまち並みも魅力だが、今も防火のために家々の軒下にバケツがぶら下がる風景は独特である。軒下のバケツはいざとなったら家の前を流れる用水路の水を活用するが、用水路の水をせき止めるための堰板は、各家庭の必需品となっている。

せき止めた用水路の水は、花の水やり、道路の打ち水に使われるほか、今でもその水で洗濯する人に出合う。

水循環システムの水の多くは「見える水」として存在し、まちの至るところで出合う。水舟と呼ばれる三段構えの水

活用システム

(図1)は、成熟した水文化の結晶で、水の見せ方も美しい。

私たち現代人の使う水は、あまりにも見えなくなってしまうたのかもしれない。水道水はパイプの中を

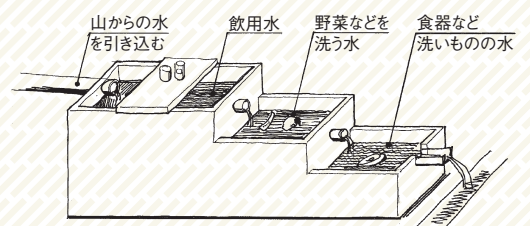


図1 水を有効に使う代表的な水舟の仕組み

通って供給され、蛇口で初めて水に出合う。郡上八幡のように使う水を見る機会がまち中に多くあると、その魅力を感じるとともに、有り難さも味わうのだろう。そこには忘れていた見せる水の魅力があった。

そしてこのまちでは、見せるのは水だけではなく、まちの中心を流れ長良川に流れ込む吉田川の橋でたまたま見ると、橋から人が飛び込むのが見えた。ここでは橋が飛び込むための装置として、肝試しの人びとを受け入れている。猛暑の中の取材に、思わず私も飛び込みたい思いを押さえて、水に魅せられた旅を終えた。

藤本英子 編集委員



写真1 屋根のある共同の水舟 消火3点セットが見られる



写真2 家先を流れる用水路 家族名のついた堰板で水をせき止める